

# 「主のしもべの歌」(前半)

「イザヤ書」からの説教 (No.7)

【聖書箇所】 42章1～9節、49章1～6節



## ベレーシート

●「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」(40:1)で始まる主の慰め(回復)の預言は、「主のしもべ」という存在を通して実現されます。イザヤ書 40～55 章(この区分は「第二イザヤ」とも呼ばれます)には、四つの「主のしもべの歌」があります。ちなみに、この 40～55 章の部分は預言書の中で、最も読まれ、研究され、深く瞑想されている箇所と言えます。実に多くの書籍があります。それは、神のマスタープランにおける旧約の**啓示の頂点**を形づくっているからです。つまり、神の救いのご計画の全貌が預言されているのです。

●四つの「主のしもべの歌」は以下の箇所に置かれています。

第一の「主のしもべの歌」は、42章1～9節。

第二の「主のしもべの歌」は、49章1～6節。

第三の「主のしもべの歌」は、50章4～9節。

第四の「主のしもべの歌」は、52章13節～53章12節。

●今回は「主のしもべの歌」の前半として、第一と第二の「主のしもべの歌」を取り上げてみたいと思います。「しもべ」という言葉の持っているイメージは、私たちが考えるイメージとは異なります。旧約聖書の中での「わたしのしもべ」、すなわち、「主のしもべ」、あるいは「神のしもべ」という存在は、神のみこころを実現していく特別な存在であり、**最高の称号**なのです。旧約では「アブラハム」、「イスラエル」、「モーセ」、「ダビデ」が挙げられます。しかし、イザヤ書40章以降の「主のしもべ」は、神の子なるイエシュアを示唆しています。

●四つの「主のしもべの歌」には、それぞれイエシュアの特徴を表わす内容があります。内容が幾分かぶっている部分もありますが、四つの歌を総合することではじめてイエシュアのご性質や働きの全貌が見えてくる仕掛けになっています。今回と次回の説教を通してそのことを学んでいきたいと思います。

## 1. 第一の「主のしもべの歌」(42章1～9節)

【新改訳改訂第3版】イザヤ書42章1～4節

- 1 見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。
- 2 彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。
- 3 彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。
- 4 彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立てる。島々も、そのおしえを待ち望む。

●実は、42章には二種類の「しもべ」が登場します。一つは、1～4節に紹介される「わたしのしもべ」と言われる存在。もう一つは、18～19節に登場する「わたしのしもべ」です。いずれも語彙としては全く同じ「アヴデー」(אָדֵי)で単数です。前者は主から期待され支えられている「しもべ」ですが、後者は主の期待に応えることのできないでいる「しもべイスラエル」です。前者の「しもべ」は、後者の「イスラエル」の失敗を踏み直す「しもべとしてのメシア」です。つまり、後にこの世に遣わされるイエシュアです。個人としてのイエシュアは、集団としてのイスラエルの民を代表しているのです。

### (1) 国々に公義をもたらす主のしもべ

●第一の「主のしもべ」の特徴はなによりもまず、この地上に「公義」を「もたらす」「打ち立てる」しもべです。「公義」ということばがこの短い箇所の中に3回(1, 3, 4節)も使われています。新改訳では「公義」と訳されています。また岩波訳と関根訳も同じく「公義」と訳しています。口語訳は「道」、新共同訳は「裁き」、中澤訳は「定め」、フランススコ会訳では「正しい法」、バルナバ訳は「公正」、ATDでは「判決」と訳しています。それぞれ異なる訳語が用いられていますが、原語である「ミシュパート」(מִשְׁפָּט)はそのような多様な意味合いがあることを示唆しています。しかしこの「ミシュパート」は神の統治概念を統括する語彙だと私は理解しています。それゆえ、「ミシュパート」を「神の統治」という言い方をしても良いのでは、と考えます。

●この「ミシュパート」の概念のすべては、神の「トーラー」(תּוֹרָה)の中に語られています。ですから、主のしもべの務めは、神の「トーラー」を正しく解き明かすことによるのみ、はじめて神の「ミシュパート」を打ち立てることができるのです。4節は同義的パラレリズムです。つまり、「公義」と「教え」は同義として使われています。

●しばしば、3節のみことば、「彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく」という部分のみが取り出されて、イエシュアの弱い者に対する優しさ、謙遜をあらわすフレーズとして説明されることがあります。それは決して間違っていないし、そうした福祉理念はすでにトーラーの中に記されています。しかし、ここでの真意は、トーラーに対する主のしもべの態度が説明されていると理解すべきです。どういうことかといえば、「葦」という言葉はヘブル語の「カーネー」(קָנֵה)で、ギリシア語では「カノン」κανωνと訳されます。つまり、まっすぐに立つ葦のように、物差し、尺度、法則、原理、基準を表す言葉なのです。ちなみに、聖書の「正典」を「カノン」と言います。したがって、イザヤ書の「いたんだ葦を折ることもなく」とは、いたんでしまった神の律法(トーラー)を再び真っ直ぐに立たせて、回復させることを意味しています。「燈心」も聖書(詩篇119:105)では神のみことば、すなわち、神の律法を意味します。「くすぶる燈心を消すこともなく」とは、民の中にあって消えかけている神の律法を、しもべなるメシアが再び燃え立たせることを意味します。それゆえ、イエシュアの「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。」(マタイ5:17)というみことばを正しく理解し、悟る必要があります。

●主のしもべであるメシアの召命は「みことばの回復」、すなわち、神の「トーラー」の回復です。それが4節の「地に公義(ミシュパート)を打ち立てる」ことと密接な関係にあるのです。「島々も」とは、異邦の人々のこと

で、彼らも「彼(主のしもべ)のおしえ(トラー)を待ち望む」ようになることが預言されています。しかも、主のしもべはそのおしえ(トラー)の回復のためには、決して「衰えることもなく、くじけることもない」のです。

●ちなみに、イザヤ書42章2節には「彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。」とあります。事実、神のしもべとしてこの世に遣わされたイエシュアは神の教えの真意を説き、その中に記されている福祉理念を表わすために奇蹟のないやしのわざをなされました。そのイエシュアが自分について来る多くの人々に対して、自分のことを人々に知らせないようにと彼らを戒められたと記されています(マタイ12:15)。そして、これは預言者イザヤを通して言われたことが成就するためだということで、42章1～4節が引用されています。このように、第一の「主のしもべの歌」には、主のしもべはのみおしえを回復する「預言者的しもべ」が強調されています。あるいは、「預言者としてのメシア」像が啓示されているとも言えるのです。42章21節にはこう記されています。「【主】は、ご自分の義のために、みおしえを広め、これを輝かすことを望まれた。」と。

## (2) 主のしもべは主とイスラエルが結んだ契約を確かなものとし、国々の光とする

●5節以降では、神ご自身が召したしもべに対して直接語りかけます。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書42章5～7節

- 5 天を造り出し、これを引き延べ、地とその産物を押し広め、その上の民に息を与え、この上を歩む者に霊を授けた神なる【主】はこう仰せられる。
- 6 「わたし、【主】は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。
- 7 こうして、見えない目を開き、囚人を牢獄から、やみの中に住む者を獄屋から連れ出す。

●1～4節に続いて、5節以降は主がしもべに対するかかわりとその務めの目的について、主ご自身が語っていることばです。神はしもべを「義をもって」召したことを述べています(6節)。「義をもって」(「ヴェツエデク」**וְצֶדֶק**)とはどういう意味でしょうか。「義」(「ツエデク」**צֶדֶק**)は倫理的な意味の「正しさ、正義」という意味もありますが、本来的には「神と人とのかかわりの概念」を表わす語彙です。ですから、主がしもべを「義をもって召した」とは、主がしもべを「愛と信頼をもって呼んだ」と言い換えることもできます。

●「召した」という動詞は「呼んだ」という動詞「カーラー」(**קָרָא**)です。「わたしはあなたを愛と信頼をもって呼んだ(召し出した)」という意味になります。ちなみに、新共同訳は「義において」を「恵みをもって」と訳しています。つまり、しもべに対する主の「愛と信頼」のかかわりを、「恵み」と解釈しているのです。

しもべに対する主の愛と信頼のかかわりをどのように描いているかといえば、新改訳では「あなたの手を握り」、「あなたを見守り」としています。しかし原文では、以下のように三つのことが記されています。

- ①「わたしはあなたの手を握み(「ハーザク」**חָזַק**)—「ハーザク」は「強める」の意。
- ②「わたしはあなたを守り(「ナーツアル」**נָצַר**)—「ナーツアル」は「見守る」の意。
- ③「わたしはあなたを立てた(「ナータン」**נָתַן**)—「ナータン」は「ゆだねた」の意。

●なんと麗しい信頼でしょうか。これらの麗しいかかわりは、主がそのしもべをして「民の契約」とし、「国々

の光」とするためです。「民の契約とする」とは、神と結んだ契約、つまりアブラハム契約やモーセ契約などを主のしもべが確かなものとすることを意味します。また次の「国々の光」とは、「民の契約」が確かにされることを通して、国々と訳された異邦の国々にも「光」がもたらされることを意味しています。ここでの「光」とは「救い」の意味で使われています。文字通り、主のしもべが、神とイスラエルが結んだ契約を確かなものとすることによって、やがてそれに接ぎ木される異邦の民たちの救いを確かにすることが述べられているのです。

## 2. 第二の「主のしもべの歌」(49章1～6節)

●第一の「主のしもべの歌」(42章1～9節)にある「主のしもべ」の特徴は、何よりもまず、この地上に「公義」を「打ち立てる」しもべです。どのようにしてそれをするのかと言えば、神のトラー、すなわち、みことばを回復することによってです。では、第二の「主のしもべの歌」の中に見られる「主のしもべ」の特徴とは何でしょうか。それは、その使命がイスラエルの回復と異邦人の救いをもたらすということです。その使命について見る前に、主と主のしもべがいかなるかわりをもっているかに注目してみたいと思います。

### (1) 主との親しいかわりの中に隠されたしもべ

【新改訳改訂第3版】イザヤ書49章2節

主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し、  
私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。

#### ① 「剣」と「矢」が意味するもの

●この聖句では、単数形で表わされる「主のしもべ」が剣や矢に例えられるわけですから、「剣」や「矢」も男性・単数名詞であることは言うまでもありません。「主は私の口を鋭い剣のようにし」とありますが、この「剣」は「みことば」の比喩です。「剣」はヘブル語で「ヘレヴ」(הֶרֶב)です。ちなみに、使徒パウロがエペソ人への手紙6章17節に「御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。」と書いていますが、そこに使われている「剣」はヘブル語聖書では「ヘレヴ」(הֶרֶב)で、剣が神のことばであるとしています。

●「とぎすました矢」の「矢」(ヘブル語で「ヘーツ」יָחַץ)も、みことばの比喩と解釈できます。なぜなら、49章2節はヘブル語特有のパラレリズム(同義的並行法)が用いられており、「主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し」ということと「(主は)私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した」ということは同義と解釈できるからです。したがって「主のしもべ」は、主によって「鋭い」「とぎすまされた」みことばの武器を持ったしもべだということが分かります。

●同じく、使徒パウロはエペソ人への手紙6章16節で「悪い者が放つ火矢」という表現を使っています。ここで使われている「火矢」は疑いや不信をもたらす意味ですが、「矢」はヘブル語にすると「ヘーツ」(יָחַץ)でイザヤ書49章2節の「矢」と同じ語彙です。ただし、イザヤ書の方の「矢」は敵を打ち破る神の「矢」です。詩篇64篇7節には「しかし神は矢を彼ら(悪者)に射掛けられるので、彼らは、不意に傷つきましよう。」とあります。イザヤ書49章2節の主のしもべの歌の中にある「とぎすました矢」は、まさに敵を打ち破る神のみことばです。

## ②「剣」と「矢」は、神のご計画の中で「隠される」

●主のしもべが、預言者としての務めを果たすための口から出る鋭い剣を持ち、神のみこころを成し遂げていくための矢となるために、時が来るまで神は隠し、神のうちにとどませたのです。語る前に、与える前に、しっかりと自分のものとして学び、備えられる必要があるのです。神はそのようにしてご自身の「しもべ」に対して十分な備えを与えられる方です。これが「主の御手の陰に隠した」「矢筒の中に隠した」という意味です。

「御手の陰に私を隠し」の「隠し」は「ハーヴァー」(אָוּר)のヒフィル態で、「矢筒の中に私を隠した」の「隠した」は「サータル」(סֵתֵר)のヒフィル態です。いずれも、神との親密なかかわりにおける重要な語彙です。

●御子イエシュアは公生涯に入るまでの30年という期間を御父のうちに過ごされ、公生涯に入られたあとも、御父のうちにとどまり続けました。その御子イエシュアが弟子たちに「わたしが御父にとどまっているように、あなたがたもわたしにとどまりなさい」と言われました。なぜなら、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないから」です(ヨハネ 15:5)。「とどまる」とは「隠遁の召し」を生きることです。御父は御子イエシュアの口が鋭い剣となるように、また、とぎすまされた矢となるように、「御手の陰に隠し」、「矢筒の中に隠した」のです。このかかわりの秘義—「シークレット・プレイス」(secret place)—を与えられたしもべ、これが「第二のしもべ」の特徴です。

## (2) いたずらに、むなしく、力を使い果たしたかのように見える主のしもべ

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 49章 4節、7節

4 しかし、私は言った。「私はむだな骨折りをして、いたずらに、むなしく、私の力を使い果たした。

それでも、私の正しい訴えは、【主】とともにあり、私の報酬は、私の神とともにある。」

7 イスラエルを贖う、その聖なる方、【主】は、人にさげすまれている者、民に忌みきらわれている者、

支配者たちの奴隷に向かってこう仰せられる。「王たちは見て立ち上がり、首長たちもひれ伏す。【主】が真実であり、イスラエルの聖なる方があなたを選んだからである。」

●主のしもべは、幾分イザヤとイエシュアがかぶっています。イザヤの働きも主のこぼを語りながら、彼の働きは「むだな骨折り」に終わったかのように見えます。捕囚前のユダの民を神に立ち返らせることは出来ませんでした。やがて来られるイエシュアの働きも、ユダヤ人を民族的に神に立ち返らせるということにおいては、実を結ぶことは出来ませんでした。力は空しく使い果たされたように見えます。しかし、神のご計画は完全に成し遂げられるのです。7節の、主が「人にさげすまれている者、民に忌み嫌われている者、支配者たちの奴隷」のように扱われる者はすべて単数であり、主のしもべとなるイエシュアのことを示唆しています。事実、イエシュアはユダヤの民にさげすまれ、忌み嫌われ、支配者たちによって奴隷のように扱われたからです。しかし、イエシュアが王として地上に再臨される時、「王たちは見て立ち上がり、首長たちもひれ伏す」ようになるのです。

## (3) 主のしもべの使命は「イスラエルの回復」と「異邦人の救い」

●第一の「主のしもべの歌」の特徴は、「公義を打ち立てるしもべ」でした。「公義」(「ミシュパート」טִישׁוּרָה)とは神の統治(支配)を表わす概念です。しかし、第二の「主のしもべの歌」の特徴は、しもべの使命が「イスラエルの回復」と「異邦人の救い」です。

【新改訳改訂3】イザヤ書 49 章 6 節

主は仰せられる。「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」

●イザヤ書 49 章 1～6 節にある第二の「しもべの歌」の内容は、しもべの使命についてのものです。その使命とは以下の二つの事柄です。

(✕) イスラエルの残りの者を連れ帰らせること〔イスラエルの回復〕

(㊄) 諸国の民の光として、地の果てにまで神の救いをもたらすこと〔異邦人の救い〕

●この二つの事柄が神のみこころの中心であり、それを実現するしもべこそ、メシア・イエシュアなのです。神のみこころという場合、神のみこころには不可抗力的なみこころと、神が人に望んでおられるみこころがあります。この二つのみこころは森と木にたとえることができます。「森」は不可抗力的なみこころのたとえです。そのみこころは、神の主権において成就するものであり、人がどんなにそれに逆らったとしても、あるいは、それが人の目にはどんなに不可能のように見えたとしても、必ず、時が来れば、成就するみこころです。後者の「木」にたとえられるものは、神が人に期待し、望んでおられるもので、たとえば、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあって神が望んでおられることです」とある類のもので、みながみなそのようになるとは言えません。

●全イスラエルの回復(ユダと失われた 10 部族を含んだイスラエル)は、人の目には容易に想像し得ないことです。しかし、それは神が主権をもって実現されるのです。神の究極的なご計画は天にあるもの、地にあるものすべてが、キリストにあって一つになることです。またユダヤ人と異邦人が共同相続人となることです。一方だけが相続するわけではありません。共同で相続するとすれば、それぞれに対して関心を持つ必要があります。これがこれからの教会に求められていることだと信じます。

●イエシュアの弟子たちは、メシアであるイエシュアからイスラエルの回復について当然のごとく教えられていたはずですが、ですから、使徒の働き 1 章で弟子たちはイエシュアに次のように尋ねています。

使徒の働き 1 章 6～8 節(新改訳改訂第 3 版)

6「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興して下さるのですか。」 7 イエスは言われた。「いつか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父が ご自分の権威をもってお定めになっています。」

8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

●イエシュアは弟子たちの質問に対して、メシアとしての当然の働きである「イスラエルの回復」の時期については、御父の特権事項であり、時が来れば必ず実現するという前提で語っています。そしてメシアのもう一つの働きである「異邦人伝道」について語られました。これまでキリスト教会は第二の働きを推進してきました。しかし、メシアの第一の使命である「イスラエルの回復」については無関心であり、長い間、置換神学によって、その働きに覆いをかけてしまいました。一方、ユダヤ人はメシアの第二の使命である「諸国の民の光として、神の救いを告げ知らせる」ことを理解できませんでした。使徒ペテロは3千人ほどのユダヤ人を救いに導きながらも、異邦人に対する神の救いを理解することができませんでした。ですから神は、ペテロにそのことを悟らせるために特別な導きを与えなければなりません(使徒 10～11 章)。

●しかし、メシアの二つの使命を奥義として正しく理解した者がおりました。それが使徒パウロです。使徒パウロはローマ人への手紙 11 章 25 節でこう述べています。

「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思ふことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。・・・」

#### (4) メシア王国の基調は爆発的な「喜びと楽しみ」

●イザヤ書 49 章 8 節には、イスラエルに約束されたゆずりの地を継がせることが語られています。

【主】はこう仰せられる。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。わたしはあなたを見守り、あなたを民の契約とし、国を興し、荒れ果てたゆずりの地を継がせよう。

●そして、第二の「主のしもべの歌」の締めくりに当たる 49 章 13 節のみことばは、次のように記されています。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 49 章 13 節

天よ。喜び歌え。地よ。楽しめ。山々よ。喜びの歌声をあげよ。

【主】がご自分の民を慰め、その悩める者をあわれまれるからだ。

●「天よ。喜び歌え。地よ。・・・」に似たフレーズはこの箇所他に、もう一箇所あります。それは 44 章 23 節です。

「天よ。喜び歌え。【主】がこれを成し遂げられたから。地のどん底よ。

喜び叫べ。山々よ。喜びの歌声をあげよ。林とそのすべての木も。

【主】がヤコブを贖い、イスラエルのうちに、その栄光を現されるからだ。」

●ちなみに、この呼びかけのフレーズは一体だれが語っているのでしょうか。主ではないとすれば預言者イザヤですが、私はこのフレーズは、「人称なき存在」の声だと考えても良いのではと思います(イザヤ 48:16)。詩篇

の中にもそうした「人称なき存在」の声語が語っている箇所が数多くあるからです。「人称なき存在」とは御霊のことです。

●メシア王国(千年王国)は、私たちの想像をはるかに越えた爆発的な「喜び」と「楽しさ」が実現する世界です。天においても地においても、そして自然界も、人間も・・・すべてが変わります。神から与えられた賜物(能力、個性など)が開花するように輝きます。しかもそれらは一つのからだのように、あるいは建物のようにすべてがむだがなく、愛によってしっかりと組み合わせられます。教会の概念がそこで初めて実現するのです。ですから、ここで言われている「喜び」と「楽しみ」は決して夢物語ではないのです。

●キリストの初臨の時にも、そこに大いなる喜びがあったことをルカはその福音書で記しています。

- ①「イエシュアをあかしするバプテスマのヨハネの誕生の喜び」(1:14, 44)、
- ②「マリアの喜びの賛歌」(1:47)
- ③「羊飼いたちに伝えられた喜びの知らせ」(2:10)
- ④「御子の任命式における御父の喜び」(3:22)
- ⑤「名が天に書き記されていることの喜び」(10:20)
- ⑥「聖霊による喜び」(10:21)
- ⑦「失われたものが見つかった喜び」(15:6, 9, 10, 32)
- ⑧「復活のイエシュアとの出会いと約束の喜び」(24:52)

●これらに共通するのは、まさに神に愛される喜び、見出された喜びです。しかも、この喜びは終末論的、存在論的、救済論的喜びです。御国における光(啓示の光、悟りの光、愛の光)の種と同時に、喜びの種もすでに信じる者たちの心の中に蒔かれています。やがてそれらの種は芽吹き、大きな喜びの花を咲かせるのです。

●天の御国は「からし種」のようだとイエシュアは言われました(マタイ 13:31~32)。「からし種」はどんな種よりも小さなものですが、やがてはどんな木よりも大きくなるのです。それが例えているように、人知をはるかに越えるような「喜び」と「楽しみ」の世界を待ち望める者はなんと幸いでしょうか。ダビデもそのことを知って預言的に語っています。「あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」(詩篇 16:11)と。

2014.10.26